

6. 人間観

6-1. 人間の分類

6-1-1. 年齢による人間の分類

生まれてすぐから2、3歳までは、男も女もティネシ teynesi(「濡れたもの」の意味らしい)と言い、4、5歳になって自分一人で食べ物を食べられるようになると、16、7歳までは、女は、マッカチ matkaci、男はヘカチ hekaci という。16、7歳から20歳くらいまでで、まだ旦那(夫)もいない人は、ポン カッケマ pon katkemat という。メノコ menoko といっても良いが、悪い意味にとる人もいる。17歳から20歳位までの結婚していない男はオクカイポ okkaypo という。少し若い人は、オクカイポ ヘカチ okkaypo hekaci という。ポン ニシパ pon nispa は、25、6歳位までの体のできた人に言う。孵化場の場長をポロ ニシパ poro nispa と呼ばれて喜んでいた。

〔白沢ナベ氏〕

6-1-2. 技能による人間の分類

ニシパ nispa とは、マタギも達者な人で、マタギに行けばクマもとれる、魚も取れる、キツネも取れる。エビス(猟漁の運)が効く、手先が明るい人。何でも取れるから楽に生活ができる人、金があるから言うわけではなく、くいっぱぐれのない人だからニシパというらしいよ。

ニシパやカッケマツ katkemat でなければクマを養うことができない。自分達の食うのに精いっぱいの人にはクマを養えない。魚をとりに行っても魚が沢山取れる人でないとクマを養えない。

舟も村の3分の1くらいの人のもっていない。マタギをするような人は舟をもっている。魚を取る人は舟をもっていなくてもできる。しかし、舟を他人から借りるとしても、壊したときには弁償しなければならぬのでなかなか借りられない。舟も含めて道具をたくさんもっている人がニシパだ。道具もない人は、ウエンクル wenkur(貧乏人)だ。火縄銃ももっている人といない人がいた。

父親も若いときは貧乏で舟をもっていなかったもので、陸伝いに行つて、寄り木のたまった所で水ガラスを使ってネトルンマレク netórun márek(寄り木の溜るところで使う短めの回転魚鉤)で魚をとった。舟のある人は、川の下や上を水をたたいて歩くから、そこから逃げてきて寄り木に隠れている魚をとるのだ。舟をもっている人は、オペカウンマレク opekaun márek(長めの回転魚鉤)もネトルンマレクも使える。

この辺の人は、村の長をコタン コロ クル kotan kor kur とは言わないが、昔話の中ではきいた。この辺ではコタン コン ニシパ kotan kon nispa という。コタンといってもま

とまって住んでいなかったのので、その所々の名前をつけて言っていた。千歳のマチヤ（町）から来ると、最初の集落をスブン ハツタル supun hattar と言った。今のお宮の近くで川の曲がりの深みを指す。そこに住んでいる人をスブン ハツタル ウン ウタル supun hattar un utar と呼んだ。父親や母親は、どこそこの偉い人という話をしなかった。

小山田彦一さんは、体も達者でマタギのうまい人だ。ムジナやリス(トウスニンケ tusuninke)など金になるものをよくとった。小山田彦一さんは、イソンクル isonkurだ。その兄の孫六さんは、あまりマタギに行ったと言うことを聞かない。彦一の父もマタギをしていたらしい。彦一の父親とナベ氏の父親サンレキテは、兄弟だ。彦一氏と孫六氏とはナベ氏の従兄弟になる。

今泉柴吉氏もイソンクルだ。猟に行くとピエ pie した(脂ののった)クマばかりをとったとよくきいた。

イソンクルとは、クマをとる人。昔は、クマもオオカミもたくさんいたというが、オオカミもどこに行ってしまうていなくなったものかと父親が言っていた。

〔白沢ナベ氏〕

パウエトク pawetok とは、言葉の達者な人で、裁判の時など意見を言い、罪の重い人は軽くしてやるような人。小山田サンレキテ (sanrekite「息止まって生まれた人が息が戻ってワーと泣いた」からついた名前だと言う) というのは、私の父だが、日高まで知られたパウエトクだと言うことだ。悪口で言うあだ名をヌマウシ numausi という。ニシパまでいかないかも知れないが、マタギしても魚をとってもエビスが効く(漁がある)人だ。父は、他人から憎まれて呪いをかけられたりもした。

〔白沢ナベ氏〕

ウコチャランケ ukocaranke「言い争い」ができるような人は、パウエトク pawetok でないとできない。昔のウコチャランケは、ずいぶん厳しいものだったそうだ。自分が正しいと思ったら、熱湯に手を入れても火傷をしなかったそうだ。

〔小田イト氏〕

パロトゥナシ parotunas は、何でも話すおしゃべりな人。

パロルイ paroruy は、女のおしゃべり。男にも女にもいう。自分のことを隠し事なく何でも話すことは、ウェンパロルイ wen paro ruy だ。パロルイクル paroruy kur 男のおしゃべり。

ラメトク rametok は、立派な戦いができる人。クマがとれる人で、物を恐れない人。

テケトク teketok は、男も女も手先が器用な人。

シケトク siketok は、目先が明るい人で、勘が働き、獲物が取れないときでこちらへ行ってみようと思つて行くと、獲物に出会ったり、フキでもあるところにぶつかるような人。

テケトコ チャシヌ ケマエトコ チャシヌ ピリカ アブカシ teketoko casnu kemaetoko casnu pirka apkas「つまづくこともなく歩いて何か良いものにぶつかる」

〔白沢ナベ氏〕

カッケマツ katkemat 縫物の達人な人。女の仕事は何でもできる人。

〔白沢ナベ氏〕

「刺繍する」ことをイカルカル ikarkar とかチカルカル cikarkar という。

〔白沢ナベ氏〕

着物を作ったり、刺繍をするのを上手な者をエアシカイ カッケマツ easkay katkemat という。縫物が下手なものをエアィカプペ eaykappe という。

〔小田イト氏〕

小さい頃から、12、3才から母親に縫物を教えてもらう。

着物を作るのが上手な人をテケアシカイ tekeaskay という。針仕事が上手な人をケメアシカイ kemeaskay とかケメアシカイ カッケマツ kemeaskay katkemat という。ケメアシカイ カッケマツ ネー ルウエ ネーナ kemeaskay katkemat ne ruwe ne na 「針仕事の上手な奥さんだな」

イテセ エアシカイ itese easkay 「機織の上手な人」。「機織の下手な人」をナ イテセ エアイカプ カッケマツ チノィネ na itese eaykap katkemat cinoyne、カッケマツ ナ イテセ エアイカプ katkemat na itese eaykap ということばがある。

〔白沢ナベ氏〕

トゥレプ turep(ウバユリ)をたくさんとってくるような人は、カッケマツ katkemat だ。トゥレプ ポロンノ タ ワ セ ワ サン turep poronno ta wa se wa san 「トゥレプをたくさんとって背負って来る」。

〔白沢ナベ氏〕

家の中にトゥレプの団子もプクサ pukusa (ギョウジャニンニク)もカボチャもオハウキナ ohawkina (フクベラ)の一縄も干していない人は、ネプ カ オアラ イサム オハウ キナ シネ テシ ポカ オアラ イサム、オシマケ シクシ ウエン クル nep ka oar isam, ohaw kina sine tes poka oar isam, osmake sikus wen kur 「何もない、オハウキナの一縄もないような裏が透けて見えるような貧乏人」と他人から悪く言われた。

ソンノ ウエンクル ネ sonno wenkur ne 「(哀れなことだ)ほんとうに貧乏なんだね」

〔白沢ナベ氏〕

6-2. 身体部位名称

サンケ アムニニ sanke amunini 「一の腕、下腕」

マクン アムニニ makun amunini 「二の腕、上腕」

〔白沢ナベ氏〕

ハイ クイクケウエ hay ku=ikkewe 「痛いなあ、腰が」

〔小田イト氏〕

容貌についての表現

アゴの長い(ノッケウェ アーネ notkewe áne)人を悪口で、チノッコピチチ cinotkopicici という。アゴの長い人は、美人と思われぬ。

鼻が低いことをエトゥコトウイ etukotuy という。鼻が低い人は、ピリカ カッケマツ pirka katkemat (美人)とは言えない。

鼻の端の長く垂れ下がって、食べているときお椀に入るくらい長い人(エトゥモミ タンネクル etumomi tanne kur)は、良いとされた。

〔白沢ナベ氏〕

男の人は、ヒゲがまっすぐでちぢれていない長いのが良いとされた。

〔小田イト氏〕

顔立ちの良い人を女ならピリカ カッケマツ pirka katkemat とかピリカ メノコ pirka menoko、シレトク コロ siretok kor という。男ならピリカ オクカイポ pirka okkaypo (とかシレトク コル クル siretok kor kur [白沢ナベ氏])という。反対にみたくない人は、イポカシ ipokas という。

〔小田イト氏〕

ウェン イポカシ クネ wen ipokas ku=ne「私は美人じゃない」とか、ナヌウェン メノコ クネ nanuwen menoko ku=ne「私は、美人じゃない」という。

イポカシ オクカヨ ipokas okkayo、イポカシ クル ipokas kur は男に言うことばで、イポカシ マツ ipokas mat は女に言うことばである。

〔白沢ナベ氏〕

6-4. 身体の世話

6-4-2. 髪型

母の世代の女性の髪型は、後頭部を短く、前髪に近いほど長くしてあり、顎で左右の髪が長くくりに長い髪型である。

〔白沢ナベ氏〕

女性の髪は、まん中から左右に分けていた。前髪を垂らすのはよくないと、前髪をたくし上げて、手拭などで縛っていた。

〔小田イト氏〕

髪の毛の赤い人もいた。そういう人は、フーレシサム hūre sisam (外国人)みたいだと言われた。

〔小山田ハヤ子氏〕

6-4-4. 病気

だれか病気すると、お金を二三十銭、クワ アコレ シリ ネ ナ kuwa a=kore siri ne na「杖をあげるよ」といいながら病人に渡すものだとお父さんに教えられた。

〔白沢ナベ氏〕

6-4-5. お守り・まじない

まじない

山などでケガをした時は、刀を空中に振ってバツテンに切る。これは悪者を切るという意味だ。刀を振るのは、アペフチ ape huci (火の神) にでも山の神にでも、その悪者をこのように切ってくれと教えるためだ。これをアタムテシパレ a=tamtespare という。父親は、kewe a=homsu kusu (後に kor と訂正した) a=tamtespare 「たいへんだったね。命だけでも助かったから良かったね」といっていた。

〔白沢ナベ氏〕

悪い魂が来ないようにするために、懐に臭いのする草、スルク クスリ surku kusuri やイケマや山ボタンの根(ホラブ horap)をいれておくと良い。ホラブ horap は、急な腹やみに良い。

臭いの強い草は家に干してとってある。普段はしないが、外に出て行くときに持って出る。ヨモギも急な腹病みに効く。

おはらい

スルク クスリ surku kusuri でエプルルセ epururse(草木を口に含んでその汁を吐き出す)する。

人間についた悪魔をはらうのに、頭、首、脇の下、腰の上と下、足の6ヶ所にカトゥンキ katunkiの紐を縛って、エプルルセ epururse しながら、それを鎌で切ると魔物(キツネが一番多い。ウェン カムイ wen kamuy という。ケナスナルベ kenasunarpe もつく)が逃げて行く。悪魔を切り落とすという意味がある。年寄りの人が男でも女でもしてやる。トゥス tusu をしない人でもやる。

夢見が悪くておかしいという人は、ウェンタラパン フミ ウェン ナ、エカシ イカキク ワイコルパレ ヤン wentarap=an humi wen na, ekas (あるいは huci) i=kakik wa i=korporayyan とかエンカキク ワ エンコレ、フチ en=kakik wa en=kore, huci (あるいは ekas) 「夢見が悪いので体を叩いて下さい」と言って頼む。50cmくらいのソコニ sokoni (ニワトコ)のチャイチャイ caycay (細枝)で先に体の前をたたき、次に背中をもっと強くフスソ フスソ husso husso とエプルルセ epururse しながらたたく。臭いがすると、同じ仲間から嫌われてまじわえなくなる、と言っておじいさんがおどしておはらいをやる。おはらいをしてくれたおじいさんには酒の2、3合買ってお礼をする。ライクル トウカプ raykur tukap (死人の霊)がついたときにもおはらいをする。

〔白沢ナベ氏〕

こわい夢を見ると塩を持って外におはらいに私は出る。

〔小田イト氏〕

悪い神様はアルウェンカムイ arwenkamuy という。アルカムヤシ arkamuyasi ともいう。

〔白沢ナベ氏〕

6-4-6. 禁忌

寝言を言っている人を起こすものではないと言われた。起こして、おまえ今何言った、とたずねると、おっかないことを言うのだそうだ。「おまえ死ぬ」とか。だから聞くものではないと。

〔白沢ナベ氏〕

クマまたぎに行く人は、行く先の夢を見ても、行く前に言うものでない、と言われていた。煙のないところへ行ってから、山に行ってから言え、ということだ。言葉は煙に乗って神様でも悪者でも聞くから、火のそばで言うものでない、と。煙の先に乗って山でもどこでも行くから聞こえる、見えるものだと。昔は焚火だから、こういうストーブになってからはどういふものか知らないけどね。

〔白沢ナベ氏〕

山に行くときは悪い夢を見ても言わないものだと。山子（きこり）も同じ。危ない仕事をすから言わないのではないか。川に行く人は関係無いのではないか。川に行く人のことは聞かなかった。煙の無い処に行ってから言うものだそうだ。

〔白沢ナベ氏〕

イチャルパ icarpa(先祖供養)の時にあ世に送ってもらいたい酒をフチ カムイ hūci kamuy にあげますので、と言って炉に垂らす(チクカ cikka)。

〔小田イト氏〕

女がカムイノミ kamuy nomi すると、「勝手なことをしてと怒られる」。エホィヨ ヤクンカムイ イルシカ e=hoyyo yakun kamuy iruska「女が神への祈りなどすると神が怒る」と怒られる。酒作りは、煮るのも男だし、イヌムバ inumpa(酒しぼり)するのも男だけだ。

ヘペレ heper(仔グマ)の養い親は女なので、飼っているヘペレには、女でも話しかけてよい。

〔白沢ナベ氏〕

6-4-7. 呪術(トウス)

トウスクル フチ tusukur hūci は女ばかりで、男でトウス tusu する人は聞いたことがない。

体の弱い人がいる場合には、イナウケ inawke(イナウ削り)してイナウ inaw に頼むらしい。それにつき神(セレマカ ウシ カムイ seremaka us kamuy)がついてくれるらしい。それをすると元気になる。千歳ではあまりトウス tusu する人は多くないらしい。父の話だとフチ カムイ セレマカ アニタタ hūci kamuy seremaka a=nitata「火の神だと思うが、魂を支えていてくれる」と言っていた。

〔白沢ナベ氏〕

6-5. 人の一生

6-5-2. 出産

赤ん坊が生まれるなと思う頃、ポン アペ アリ pon ape ari (別に小さな火をたく) する。ポン アペ pon ape は、新しい命が生まれるときの番兵だ。

産婦も子供も汚れているから3週間の間本当のアペフチで産婦や子供の食べるものの炊事はしない。

立会いをする女は、へその緒を切ったり結んだりして産婆を手伝う。お産をするときには、エカシ(年老いた男)も立ち会う。このエカシは、他人ではまずい。親戚のエカシで口の達者なものである。お産の時にも火の神には女がお願いできないからエカシが必要だ。

お産が終わると取り上げてくれた女(イコインカン ルプ マツ ikoinkan rupne mat)とお産をした女、立会いをした女にイナウキケ1本で両端を縛って首輪にしてかける。まん中にセブパ seppa(鏝)をつけることもある。

[小田イト氏]

6-5-3. 育児

子供の遊び

子供はペッチチャイ petcicay(岸辺の浅いところ)に下りて、石を投げて(スマ エヤブキリ suma eyapkir)どこまで届くか競い合う。また、スマ テパ suma tepa という平たい石を投げて水切りをした。

[白沢ナベ氏]

手の平に唾を垂らし、その上にネコヤナギ(ススポイセタ susupoyseta)をのせ、少し手の平を傾け手首をトントンと叩くと、ネコヤナギは手首のほうに滑ってくる。舌の前部を下唇のうらに当て、吸打音をたて、また「ヨーヨヨ、ヨヨヨ」と言って早く手首に寄せるのを競う。「おらの犬来たぞ、おまえのまだだ」といって妹と遊んだ記憶がある。(スス susu「ヤナギ」、ポイセタ poyseta「小犬」)

[白沢ナベ氏]

6-5-6. 葬礼

私が見たアイヌ風の葬式は、母の実家の塚本のじいさん、白沢ナベ氏の母の兄(「チフネのじいさん」父の親戚にあたる)だけだ。

テクンペ tekunpe「手甲」、足に巻くもの、ホシ hos「きゃはん」などを生前から用意しておく。

[白沢ナベ氏]

死者に着せる着物は色変わりの布で2枚作る。赤いきれは用いない。

[小田イト氏]

ホシ hos「きゃはん」は、下の方は白いさらし、上の方は横縞か、あれば黒を使う。巻くの

ではなく、はかせる。袋きやはんにしてはかせるのは、フチ huci「祖母」が亡くなった時に見た。

〔白沢ナベ氏〕

年寄り自分の支度しておくものらしい。奥さんが旦那さんの分も作る。用意していないと恥しい。全部用意しておく。自分が先に死んでも、死装束を残しておいて死ぬらしかった。テクンペ tekunpe「手甲」はどんなものでもいい。赤は使わない。着物に模様、襟もつけない。普通にきるものなら縞でもかすりでもいい。昔はフク カ イサム huku ka isam「服もない」、着物ばかりだ。死装束はライクル アミブ raykur amip という。

〔白沢ナベ氏〕

ニシパ nispa はアツシ（木の皮製の衣類）のいいのを着る。

〔小田イト氏〕

死者は白いさらして顔をおおう。鉢巻でとめる。鉢巻は黒いひもで、名はない。死者の顔の覆いをナンカムプ nankamup という。

〔小田イト氏〕

死人はエウトウンネ eutunne「下座に」寝かせる。頭はエロンネ eronne「上座に」向ける。火から離れている。死者のまわり（壁側と炉側）には年寄りが座っている。

〔小田イト氏〕

人が死んだときの葬式（イヨイタクコテ iyoytakkote というのか）は、黒色のトゥキ tuki（杯）、黒色のタカイサラ takaysara（杯を載せる台）を使う。その他のカムイノミ kamuynomi には、赤いトゥキと赤いタカイサラを使う。死んだときにはイタンキ itanki（椀）にとんがるように御飯を盛るが、クマ送りの時には平らに盛る。

〔小田イト氏〕

葬式の時、ユーカル yukar をやることがある。この時、半分でやめる。ウウエペケレ wepeker も同じだ。わけがあるらしい。みんな言ってしまうと、言った人の魂もみんな持って行ってしまう、とかっていう。

〔白沢ナベ氏〕

ユーカル yukar を半分でやめるということは聞いたことない。

〔小田イト氏〕

お膳に団子など山盛りにして、来た人皆で分けて食べる。このごちそうに名はない。（死者には）さらして小さい袋を作っておみやげとして米、菓子、団子を持たせる。これはマラット maratto ではない。マラット maratto はカムイ kamuy にあげるもの。

〔小田イト氏〕

死者が男なら鞆におさめた刀を胸に置く。女ならタマサイ tamasay「首飾り」を胸に置く。

〔小田イト氏〕

死んだ人を葬れるようにしたもの、包んだものをオツ ot という。担いで埋めて来るように

したもの。

〔白沢ナベ氏〕

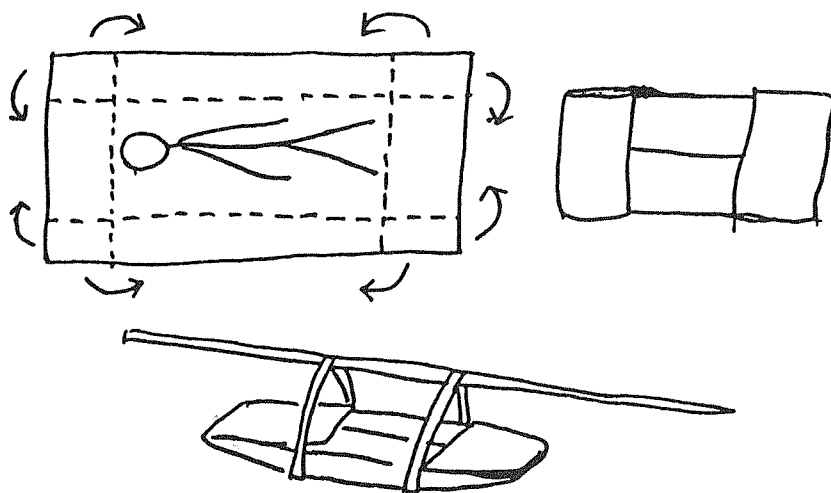
オッ ot (死体のこも包み) はヤットウイ yattuy (ござ) でくるんで、ケム kem (針) を使わず、ござに木 (ピン状のものらしい・・・調査者) を刺して、ウトキアッ utokiat (黑白まだらの細いひも) で (ステッチ状にして?・・・調査者) とめる。これを棺におさめた。そのころ、もう棺があった。困った人はいれなかったけれど。それから、ツルウメドキの皮の色をぬいてカエカ kaeka (よる) した糸に色のついたきれ (黒) を混ぜて編んだ縄 (ムリル murir という) で棺を縛って棒に通し、担いで墓場へ運ぶ。これらの紐、縄はばあさんがたくさん作っておき、持っていない人にやったり、貸したりする。棒は太い棒で2人で担ぐ。男が交替しながら運んだ。力のある、心のある人が担ぐ。あまり若い人、背の低い人はだめだ。墓穴には、先にござを2枚立てかけ、棺を入れてからその上にござを倒す。そこへ土をかける。

〔小田イト氏〕

ござは普通のヤットウイよりも長い。タンネ ヤットウイ tanne yattuy (長いござ)、ポロ ヤットウイ poro yattuy (長いござ) だ。

〔白沢ナベ氏〕

図11. 亡くなった人の包み方



ござはカトウンキ katunki で作る。

〔小田イト氏〕

死人用のござは長いからカトウンキ katunkiは長く刈る。

〔白沢ナベ氏〕

シキナ sikina (ガマ) で死人のござは作らない。短いから。

〔白沢ナベ氏〕

ヤットウイ yattuy で包んだ死体は棒から2本のムリル murir で下げ、2人の男が墓まで運ぶ。馬車、馬そりに載せて墓まで運ぶこともあった。そのときは馬のくつわに白い布を付けた。また、女性は白い布を頭に巻いた。

〔小田イト氏〕

ニシパ nispa (金持ち) は板を集めることができるからお棺を作ることができるが、ウェンクル wenkur (貧乏人) にはそれができないので、木の棒を5本ほど並べた上にヤットイ yattuy (ゴザの一種) で包んだ死体を置き、ムリリ murir (紐の一種) で墓まで運ぶ。お棺のことを「はこ」とか「かんばこ」と言っていた。お棺に入れるときもヤットウイで死体を包む。

〔白沢ナベ氏〕

死体を家から出す時には wen apa という戸口を家の横に開けて出す。本当の人間の出入りする戸口からは出さない。悪い戸、という意味だ。今ならピリカ アパ pirka apa も wen apa (良い戸口) もないけれど。

〔小田イト氏〕

死人がホシビ hosipi (戻る) すると困るから別の戸口から出すのだろう。

〔白沢ナベ氏〕

ライクル raykur (死人) は、イトムンパヤル itomunpuyar (南窓) から出入りしない。

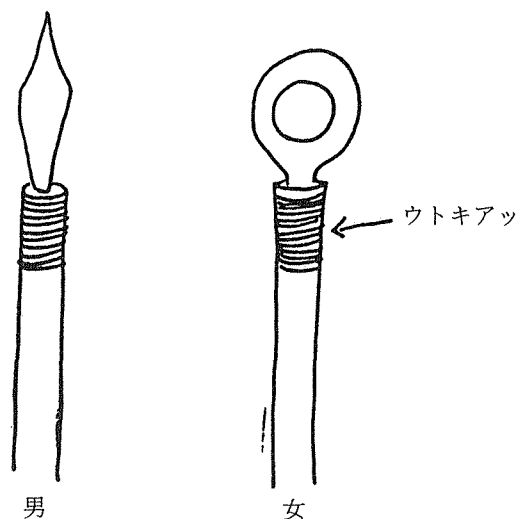
〔白沢ナベ氏〕

墓穴は四角形に掘り(深さ1 m)、壁のまわりに1枚の長いヤットウイを立てかける。死体を入れると壁のヤットウイを死体の上に折り曲げて土をかける。

〔小田イト氏〕

墓標(クワ kuwa) は男と女では違った形をしていた。ウトキアツ utokiat (紐の一種) をクワに巻いた。

図12. 墓標



クワ kuwa (墓標) は、男は頭の左、女は右に立てる。男の墓標はオクカヨ クワ okkayo kuwa、女の墓標はメノコ クワ menoko kuwa という。

〔小田イト氏〕

墓標は アシニ asni といった。

〔白沢ナベ氏〕

シト クワ sito kuwa、オプ クワ op kuwa というアイヌ語は知らない。

〔白沢ナベ氏、小田イト氏〕

男の墓標はメノコ アシニ menoko asni、女の墓標はオクカヨ アシニ okkayo asni という。

〔白沢ナベ氏〕

墓標になぜ白と黒のきれをつけるのか、ウパシクマ upaskuma (由来話) は聞いたことはない。

〔白沢ナベ氏〕

刀にはエムシ アトゥフ emus atuhu (刀帯) をつけていなかった。棺に入れる前にタマサイ tamasay (首飾り)、エムシ emus (刀) は取ってしまう。これらを一緒に埋めることはない。木で作った模型を入れることもない。

〔小田イト氏〕

タシロ tasiro (あなた)、マキリ makiri (刃物) を一緒に埋める。その他、お膳、釣り針、釣り糸、マレク marek (回転鉤) など、使っていた商売道具をみんなもたせる。一緒に埋めてしまう(これらは男の場合)。女の場合には、ちゃわん、皿、しゃもじ、へら、針、糸、箸、お膳などを埋める。これらは壊したりしない。又、女の場合は、アシニ asni (墓標) の側になたで穴を開けた鍋を置く。また、お鉢に水を入れて墓まで持って行き、墓標に勢いよくかぶせて底をぬかす。

ワッカオブ wakkaop (お鉢) は割らないと仏さんがあの世に持って行って使えない。仏さんも死んだから使うものも殺すということだと思う。鍋も割る。着物にはさみをいれたのは見たことない。茶碗は割らずにそのまま入れる。

〔白沢ナベ氏〕

死んだ人が行く行き先はわからない。ただ、火の神様(モシリ コル フチ mosir kor huci という) が話をつけて、親兄弟のところへ送ることになっている。アイヌ aynu では火の神様が一番偉い。坊さんの役をする人は大事だ。家のじいさんや、親戚のじいさんがやる。それでも死者は迷わないで行く。途中で鳥とかいろいろなものがいて、供え物が食べたくてうるさいので、それを追い払うためにクワ コル kuwa kor (つえをつく) という話だ。クワ kuwa の神様のことは知らない。

〔小田イト氏〕

家送り儀礼

誰それ婆様にチセ ライレ cise rayre (家を送る) する、と言ったのを聞いた。燃やすからだな、と思って聞いていた。

〔白沢ナベ氏〕

男には家を持たせない。

〔白沢ナベ氏、小田イト氏〕

死人に持たす家は仮小屋だが、火だな、炉かぎが作ってある(煮炊きはしない)。ソ カル so kar(ごぎを敷く)もしてある。20人位は入れる。他のところでごちそうを作って、親戚の者(若い人は来ない)がその仮小屋に集まって飲み食いする。

〔小田イト氏〕

仮小屋は普通の家と同じ形をしている。壁も窓もある。わたしのお母さんは小さい人だったからそんなに大きくなかった。こわさず、そのまま戸口から火をつけて燃やした。私のお母さんがそういう始末されたのを私は見ました。

〔白沢ナベ氏〕

岩山さんのばあさんが家送りの最後だった。

〔小田イト氏〕

子供の葬式

子供が死んだ時は何もしない。

〔白沢ナベ氏、小田イト氏〕

1つ2つ、5つ6つの子供が死んだ時はいいとこだから行け、とお寺する。女の子は、ばあさん行っているからそこさ送るから、そんなに面倒なことはしない。アペフチ apheuci(火の神)が送って行ってくれる。先に話を通しておいてくれる。エカシ ekasi、フチ huci が迎えにくるんでないかな。

〔白沢ナベ氏〕

子供にはアシニ asni(墓標)は作らない。棺桶に入れてヤットウイ yattuy(ごぎ)をかけるだけだ。

〔小田イト氏〕

子供が死んだときは棒を切って印に立てることはあつたらしかった。

〔白沢ナベ氏〕

子供の弔いは男女の区別無し。結婚前の人には墓標は作らず、ちょっとした棒を立てて親、親戚の並びに埋める。

〔小田イト氏〕

変死者の葬礼

火事などがあつたときあるいは事故で人が死んだときには、悪い魔物のせいだと考え、葬式には特別の踊りをする。これをニウエン ホリビ niwen horipi という。男は列を作って、刀をもつが、ホリブパ horippa と異なり、刃を外に向けて踊る。男は、外側に列を作りホッ、ホッと言って悪い魔物を切るという意味で刃を外に向ける。その内側に女が列を作って男に従いウォーイ、ウォーイと左手に杖を持ち、右手に拳にして、その拳を振って踊る。家の外庭の近くに置いた遺体に向かって歩いて行く。

〔小田イト氏〕

事故で人が亡くなった時に女が左手にもつ杖をヨモギの枯れたもので作る。ヨモギの頭を下にして、ヨモギの根を上にして持ち、その杖を地面に刺す。そうするとヨモギが成長して、芽が地下に向かって伸び、その下にいる悪者は、ヨモギに引っ張られてティネポクナシリ teyne pokna sir (湿地の下界) に落とされてしまう。

〔白沢ナベ氏〕

ウキリカアチャポの家が火事にあつたときに、ウニウエンデ uniwente と言って、白老やカマカからも人がきてその時にニウエンホリビをやった (ウニウエンデもニウエンホイリビも同じ事を指す)。

〔小田イト氏〕

山で亡くなった人なら家の近くまで運んで来た遺体に向かって「おまえは山で死んだのだから、当り前の人間ではなくなったから家の中に入れてはいけないのだ。」とわかるように話す。アペフチ apéhúci (火の神) にもそう話す。事故で死んだ人もポクナシリ poknasir (下界) に行く。悪いことをして死んだ人は、ポクナシリには行けず、ヤチネ ポクナシリ yacine pokna sir (ティネ ポクナシリ と同じ。悪いものの行く湿地の下界) に行く。

〔白沢ナベ氏〕

家の外で事故などで亡くなった人は、家の中へ入れず庭の前の道路の縁あたりで葬式をする。ニウエンホリビをやった後、道路の縁にカシコツ kaskot (仮小屋) みたいなものを作って葬式をする。

災害で死んだ人は、男でも女でもカシコツを作って燃やして送ってやる。普通の時は、男が死んでもカシコツは作らないが、女の人には、カシコツを作って送る。カシコツは、人が20人くらい入れる。屋根も壁もある。中には炉や火棚を作り、炉鉤も下げる。

〔小田イト氏〕

火事で死んだ人には家は送らない。

〔小田イト氏〕

6-5-7. 生死観

子供はあの世からくる。小さな赤ちゃんが死んだら、アペフチカムイ ape huci kamuy (火の神) に預かってもらい、生まれ変わってかえって来るように祈る。

妹が双子 (チェウコ cewko く? ci=euko) で生まれたが、片方が死んでしまった。アペフチに預かってもらい、同じ親の懐にあるいは親戚にまた戻って来るようにとお願いする。双子はあまり良いものと考えられていない。双子は、後で生まれた方が妹である。

〔白沢ナベ氏〕

物語の中では、男と女の双子が生まれたら、片方を養子に出して別々に育て、後に夫婦にするとする話がある。

〔小田イト氏〕

流産した子は、ヤットイ yattuy を小さく切って巻く。ヤットウィをかぶせて埋める。ア

ペフチ（火の神）に預かってもらう。

新しい生命が生まれるときには、あの世からこの世へ通じるトンネルをくぐって来る。アペフチ（火の神）がこの世に連れて来るのかも知れない。

〔白沢ナベ氏〕

先祖供養(イチャルパ icarpa)は、決まった日にやるのではなく、酒をこしらえて一軒一軒で個別にやる。夜に行う。イチャルパもできない人がいた。イチャルパをできるようになるのが一人前の男だ。イチャルパ サケ icarpa sake もクマ送りの時の酒と同じように女ではなくて男が作る。イチャルパをするのは、イナウ チパ ケシ タ inaw cipa kes ta (祭壇の下手)で、イトムンプヤラ itomunpuyar (南窓)のそばにチェホルカケブ cehorkakep を立てその前にチタルベ citarpe(模様つきゴザ)を敷く。(外に火を持って出てイナウの前に置く。

[小田イト氏]。家の中でカムイノミをして、フチカムイ huci kamuy (火の神)に口の達者な(パワシヌ pawasnu あるいはパウエトク pawetok)ウスシウ ussiw に手伝って(ウテク utek)くれるように(フチ カムイ エウテク ウウスシウエ、 パワシヌ カムイ エイエニコニスク シンリッ オルン ウサ アエフ イナウ ネ ヤクカ トウラノ トウラノ エルラレ ワ イコレ クス ネーナ huci kamuy eutek ussiwe, pawasnu kamuy eyey-konisuk sinrit orun usa aep inaw ne yakka turano e=rurare wa ikore kusu ne na「火の神を手伝う小使、口の達者な神に助けてもらって食べ物でもイナウでも一緒に持って行かせて下さいよ」と言って)頼むので、火を持って出ないこともある。そこに座ってまず男が先にキケの部分に1本ずつ酒をチクカ cikka (垂らす)し、シラリ sirari (酒粕)を乗せる。つぎに女が同じように行う。チタルベ citarpe に座る女は、オンネ マツ onne mat(年寄りの女)ばかりで、その後ろに若い人が座る。立てるイナウは、お祈りをする先祖ひとりに1本ずつ立てる。父方をエカシ イキリ ekasi ikiri、母方をメノコ イキリ menoko ikiri という。旦那のエカシ イキリにもメノコ イキリにもイナウをたてる。チェホルカケブ cehorkakep (イナウの一種)の立ち並ぶ後ろにも酒を垂らす。これは、無縁仏にも祈ると言う意味だ。イチャルパ(先祖供養)の時に必要なイナウやトゥキ tuki (杯)などは、神窓からではなく、イトムンプヤル itomunpuyar (南窓)から出す。子供や若者にイナウは送らない。何代も前の人にもイナウは送らない。送っても届かないのだ。死んだ人は、まず神様が悪い人かよい人か判断し、悪い人とかウエン カムイ wen kamuy(悪い神)はヤチネ ポクナシリ yaci ne poknasir とかティネ ポクナシリ teyne poknasir という、ポクナシリ poknasir のさらに底にある世界にけ落とされる(ティネ ポクナ シリ アコオテレケ teyne pokna sir a=kooterke)。ヤチ yaci の底にいるからこの世には戻って来れない。最後には、人間の嫌いな虫(イコンカブ ikonkap 毛虫やテレケイペ terkeype 蛙)や鳥にされる。ヤチネ ポクナシリ yacine poknasir に送られた人に供養はしない。良い人はポクナシリ poknasir に送られて、この世と同じ様な生活が送られ。さらに時が立つとさらに奥のナ イマカケノ ポクナシリ na imakakeno poknasir に送られる。何代も前の人でナ イマカケノ ポクナシリに行った人には物を届けて

も届かないので供養しない。良い人は、人間に生まれ変われる。ナ イマカケノ ポクナシリからこの世へ戻って来る。アペフチ（火の神）があゝの世からこの世へ新しい命をもって来る。ア
フンボル ahunporu(アフンル ahunruがアフンボルに ahunporu になったものらしい)を通
って戻って来るのだとおもう(ナカナク アラム ルウェ アン nakanak a=ramu ruwe an)。
アフンボルは、この辺にはないのではないか。

イナウは魂だけがあゝの世に行くから、魂の抜けたイナウだけが残る。残った魂の抜けたイナ
ウは、ホプニレ hopunire（送る）して山に戻す。立派な木に育って下さいと祈る。アペフチ
（火の神）のカムイ トウンチ kamuy tunci（神の家来）が先に行っているからイナウが何
かを告げるということはない。カムイ トウンチは、カムイ ウスシウ kamuy ussiw と同
じだ。あゝの世の人は、この世の人がイナウまでも心がけて送ってくれたと言って喜ぶ。

〔白沢ナベ氏〕

死んだ人は埋めるから、地下に行く話だと思ったけど、やっぱり穴に入るのだな、と思った。
私は夢に見た。おまえ、その梯子をとられたら帰れなくなる。早く梯子とられるまえに帰れ、
と12でなくなった兄が出てきて言った。トット toto（母）、ハポ hapo（父）のもとに帰れな
くなる。おまえいなかったら足もがれたのと同じでないか。早く帰れ。も、あわれないんだか
らね、と断わられて、はしごをのぼると、畑、馬小屋が見えたので、あ、帰ってきた、とい
うところで目が醒めてしまった。帰ってから一度も夢にみない。も、行かない。200年も行かない
でや。

また、あゝの世のお母さんとお父さんのところへも行った。はしごから降りていった。大きな
家の中に入っていくと、お父さんはせなかあぶりをしていた。お母さんはカエカ kaeka(糸を
よる)していた。そこで、わしは、アペケシ ウトゥッタ apekes ututta（炉の下手）でひざ
をついてだはん（不平）した。おら、今こんなとこさ来たらどうするんだ、と言って。一人で
行ったんでない。姉、妹と3人で行った。子供らどうやっておがるんだ、と言ってだはんした
ら、お母さんが、フンナ エテシカル ワ アリキ メノコ ウタル ネ ワ サカヨカル ハ
ウエ アン hunna eteskar wa arki menoko utar ne wa sakayokar hawe an（誰の呼んで来
た女どもが騒いでいるんだ）と言った。誰も手紙も電報も出さん、誰も来いとも言ってないの
に、来て、なにいばっている、ということだろうと思う。すると、お父さんは、e:m(この m
は吸気で発音された)と言った。

〔白沢ナベ氏〕

あゝの世はポクナシリ poknasir、ポクナモシリ poknamosir と言う。この世はテウン モ
シリ teun mosir と言うかな。

〔白沢ナベ氏〕

ティネモシリ teyne mosir は地獄。地下にある。極楽はポクナシリ poknasir という。

〔小田イト氏〕

悪いクマはヤチネ モシリ モシリ マサマ yaci ne mosir asama（湿地、大地の底）に

アオレレ a=orere(沈められる)。人間にはそういうことはない。アコテレケ a=kooterke(け落とす)ともいう。

〔白沢ナベ氏〕

母が死んだ時、形見にいつも着ていた着物をもらったが、夢見が悪い。着物がほしい、と母が現れたので、燃やして送ると、夢を見なくなった。

〔小田イト氏〕

私の叔母の八重ばあさんは、トゥス tusu(いたこ)する人だった。なくなったとき、仮小屋にカケンチャ kakenca(着物掛け)から着物をかけ、壁につるして、普段着ていたものをさげた。娘は、物のない時代の事だから、角巻を1枚、形見にとっておいた。ある日、私の家の近くの坂を娘が自転車で通りかかると、かぶりものをかぶったばあさんが、自転車よりも早く前を横切って、そばの家(私の家)の方に行った。娘が不思議に思って、私の家へ来て、誰か来なかったか、と聞いたが、誰も来ているはずもない。そこで、いたこの人に見てもらおうと、いたこの口から八重ばあさんが、寒くて寒くて、とトゥスに出てきたので、角巻を送ってやった。

また、ある雨の降る夜遅くに、姉崎さんが家族と墓参りに行った。自分の親をおまいりしていると、後ろの八重ばあさんの墓の方でエトロ etoro(いびきをかく)の音がした。それで、なんだ、エトロしないで起きて食べ、と言ったそうだ。その音はハルちゃんも姉崎さんの奥さんも聞いたそうだ。姉崎さんは霊のよく見える人だ。

〔小山田ハヤ子氏〕

男でも女でも、霊の見える人と見えない人がある。

〔白沢ナベ氏〕

6-6. 動作・仕草

視線・表現

目付きをシクトゥム siktum という。

〔小田イト氏〕

目に赤い筋の入った人(シクトゥム ケムリツ オシマ siktum kemrit osma)は、短気で気が荒い人だという。

〔白沢ナベ氏〕

他人の家でキョロキョロ周りを見回す人をシクカリレ ウェニウエンデクル(マツ)sikkarire wen iwente kur (mat) といい行儀の良くないこととされた。

〔白沢ナベ氏〕

歩行・走行

ホユブ hoyupu は、「走る、ぶっ走る」こと。パシよりも速く走る。

パシ pas は、「急ぎ足で歩く」。カマパ オロワノ クホユブ ワ マチヤ オロパクノ クサン kamapa (or) wa no ku=hoyupu wa maciya orpak (no) ku=san 「カマカから走って

街まで行った」。カマパ オロワ クパシ ワ クサン kamapa orwa ku=pas wa ku=san「カマカから急ぎ足で行った」。

チャシヌ casnu は、「転ばずに立派に歩く」こと。

〔白沢ナベ氏〕

忙しいときは小走りだが、クマでも捕ってきた時は、オリパク oripak (恐れ慎む)すれと男の人に怒られるから、静かに歩くものだ。

〔白沢ナベ氏〕

ケロタクヌレ kerotaknure という言葉があり、家の外でも内でもドンドンと足を踏む音(タク tak)を立てて歩くのは良くない。ケロタクヌレ ウェニウエンテ クル ケロタクヌレ ウェニウエンテ マツ kerotaknure wen iwente kur kerotaknure wen iwente mat ということばがある。イウエンテ iwente は、人を悪くするということ。

ケロリムセ kerorimse とは、トントンと踊るような足音を立てて歩くことで、ケロリムセ ウェニウエンテ クル ケロリムセ ウェニウエンテ マツ kerorimse wen iwente kur kerorimse wen iwente mat ということばがある。ケロタクヌレもケロリムセもいずれも悪い歩き方だと言われる。

かかとをひきずって歩くことは、ケロニムパ keronimpa という。悪い歩き方だといわれていた。靴のかかところが非常に減るのはよくないとされた。

〔白沢ナベ氏〕

座り方

男の人はあぐらをかいて座る。あぐらをウキリホセレ ukirhosere という。「あぐらをかく」の語形は、ウキリホセレ u-kir-ho-se-re。

〔白沢ナベ氏〕

アシヌシヌ ムンカラ asinusinu mun-kar「座ってお尻をずらして草むしりをする」年寄りなどは、腰が痛くなるのでずって草むしりをしていた。

年寄りの女の人達は、立て膝をして膝をくっつけて足もくっつけて座る。その上からモウルが覆って足の先も見えない。(モウルがあがっていたらアンチョ(女陰)が見える(ホパラタ hoparata)のでたいへんだ[小田イト氏]。)立て膝の座り方をコクカキサルコル kokkakisarkor とかコクカキサンロシキ kokkakisansroski という。このことばは、顎を膝の上に置き、膝が耳にくっつくようにして座る格好を表現したものだ。

横座りをホペチネア hopecine'aという。若い人は普段横座りするもので、立て膝座りをしてはいけない。立て膝すわりをするとヘマンタ ロク エネ アニ アン heman ta rok ene ani an「なんて座り方しているんだ」と叱られる。

〔白沢ナベ氏〕

カムイノミの時は、年寄りも横座りする。

〔小田イト氏〕

テタ エク ワ ア téta ek wa a 「ここに来て座りなさい」

テク エク ワ モノア téta ek wa móno'a 「ここに来て座りなさい」ともいう。どちらかというともノア móno'aの方がていねいな言い方だ。

3～4人の人に向かって「ここに座りなさい」という時は、テタ ロカン téta rok=an という。

テタ エク ワ モノロカン téta ek wa mónorok=an 「ここへ来ておすわりなさい」という。モノロク mónorok だけなら投げ言葉でぞんざいな言い方になる。

ポン カツケマツ ウタラ ホペチネア ワ オカ pon katkemat utar hopecine'a wa oka
とか ポン カツケマツ ウタラ ホペチネロク ワ オカ pon katkemat utar hopecinerok
wa oka ともいう。

〔白沢ナベ氏〕

よその人にはテタ エク ワ モノア ヤン téta ek wa móno'a yan 「ここへ来ておすわりなさい」という。テタ エク ワ モノアン téta ek wa móno=an とは言われない。テタ エク ワ ア ヤン téta ek wa a yan 「ここへ来ておすわりなさい」ともいう。

〔小田イト氏〕

昔の家では、よその人に ナ エロンネ シルトウ ワ アペ克蘭 na eronne sirutu wa apekur=an「火のそばにずっと来て座りなさい」というらしい。こういうことばが物語に出て来る。座ったままでお尻をずらして行くことをシルトウ sirutu という。複数の人に対しては、ナ エロンネ シルッパ ワ アペ克蘭 na eronne wa sirutpa wa apekur=an という。

〔白沢ナベ氏〕

屈伸

「膝を曲げずにこごむ(かがむ)」ことをホック hotku という。ホック ワ ムンカル コラン hotku wa munkar kor an 「かがんで(畑の)草むしりをする」。草刈り(ムントウイエ muntuye)の時もホックする。

〔白沢ナベ氏〕

ア ワ ネプキ a wa nep ki 「座って何でもする」。

ア ワ アシヌ コル ムン カル a wa asnu kor munkar 「尻を地面につけ座った状態で草むしりをする」。アシヌ asnu とは、お尻で地面をずること。

横になる・寝る動作

クトレホッケ ワ カン ルウェ ネ ナ k=utorehotke wa k=an ruwe ne na. 「私は横になっていますよ」

ウトル utor 「体の横」、 「体の横、横腹、脇腹」はウトルサマ utor sama というが、物体の側は、ウトルとは言わない。身体にのみ使うことばらしい。

ウトレホッケ utorehotke またはウトル エホッケ utor ehotke 「横になる」

「シウトルサマという言葉はあるか」との問いに クヌ カ エラムシカリ ku=nu ka eramusi-kari (語形不確か★編集者) と答えた。

クットコ ホッケ kuttoko hotke「仰向けに寝る」。クットコノ ホッケ kuttokono hotke「仰向けに寝る」。「仰向けに寝る」ことをカンナホッケ kannahotke ともいう。後にカンナホッケは「2度寝する」の意味だと変更された。

子どもをクットコ kuttoko「仰向け」にばかり寝せるとウプシヒ upsihhi「後頭部のでっぱり」がなくなる。そういう人がたくさんいた。私の孫もおおむけばかりだからウプシヒ upsihhi 無かったが、大人になったら直った。魚の頭のでっぱりもウプシヒ upsihhi という。ウプシヒ ア キク コロ ナニ ライ upsihhi a kik kor nani ray「後頭部を叩くとすぐ死ぬ」

〔白沢ナベ氏〕

ウプシ ホッケ upsi hotke「うつ伏せに寝る」

クンネアシン kunneasin というのは何だ？(小山田ハヤ子氏)。クンネアシン ku=kunneasin は、「夜中小便に起きる」。そういう時が、カンナホッケ kannahotke「2度寝する」になる。

眠る動作

カエスイェ ア ナン k=aesuye a nan?「わたし居眠りしていたかい」。エアエスイェ コレアン e=aesuye kor e=an「おまえさん居眠りしていたよ」。カエスイェ コロカ ナ ワ k=aesuye korka ne wa「わたし居眠りしていたのか」と答える。カエスイェ ソモ キア ワ k=aesuye somo ki a wa といったらスンケ sunke「嘘」になる。

ウクラン ケトロ コロ カン ルウェ ukuran k=etoro kor k=an ruwe. 「ゆうべ私いびきかいてたかい」。ウクラン ポー エトロ ハウ クヌ ワ クモコロ カ ニウケシ ukuran po: etoro haw ku=nu wa ku=mokor ka niwkes「ゆうべひどいいびきの音を聞いて眠れなかった」。

トカブ ホッケ tokap hotke「昼寝」

モコロ mokor「夜寝る」

〔白沢ナベ氏〕

昼寝をトカブ モコロ tokapmokor とは言わない。(クンネ kunne「夜」、トカブ tokap「昼間」)

〔白沢ナベ氏、小田イト氏〕

アイスイェ aysuye「居眠りをする」

〔小田イト氏、小山田ハヤ子氏〕

ク アイスイェ アナン ku=aysuye anan「私が居眠りした」ともいう。カイスイェ カ エラムシカリ kaysuye ka eramusikari「私は居眠りしたことないよ。そんな暇なかった」

〔白沢ナベ氏〕

モコロヘセレ mokorhesere 「寢息」

エモコロヘセレ e=mokorhesere 「おまえが寢息を立てる」と言える。モナク monak 「目醒めている」していてもモコロ mokor 「寝る」する時、モコルヘセレ mokorhesere 「寢息」の荒い人もいる。赤ちゃんが静かに寢息をたてているのをお客が見て、赤ちゃん、シンタ オッタ モコン ルウエ sinta otta mokon ruwe 「赤ちゃん揺りかごで寝てるな」というだろうね。

エトロ etoro 「いびきをかく」

あんたの鼾うるさい、ということは、イラムシツネレ エトロ クル アン ハウエ iramsitnere etoro kur an hawe 「うるさい鼾をかくひといるなあ」という。

〔白沢ナベ氏〕

エモコロアプカシテ コロ エアン、エアムキリ ア e=mokorapkaste kor e=an, e=amkira? 「おまえ、寝ながら歩いていたよ、わかっていたか」。

エモコロイタクテ エアムキリ e=mokoritakte e=amkir? 「寢言を言っていたのわかっているかい」と聞く。

ヘマンタ ポロンノ フミ アシ ワ エウン コモシ hemanta poronno humi as wa eun ku=mos 「何か大きな音がしてそれで目が覚めた」

〔白沢ナベ氏〕

夢

夢を見るはウエンタラブ wentarap 「夢を見る」という。これは悪い夢のことかもしれない。クマを取る良い夢を見たということ。

〔小田イト氏〕

夢を見ることをク タカラ ku=takar とも言う。ウエンタラブ wentarap もタカラ takar も中身は一つ。チニタ cinita と言うこともある。これは眠って寢言を語る人のことを言う。

〔白沢ナベ氏〕

夢でうなされることはチニタ cinita という。

〔白沢ナベ氏、小田イト氏〕

ウ克蘭 エチニタ ukuran e=cinita 「ゆうべおまえ寢言言った」

子どもが夢を見ているとき、赤ちゃんはチニタ cinita している、という。

〔白沢ナベ氏、小田イト氏〕

エチニタ ハウエ アン e=cinita hawe an 「どんな夢を見てうなされていたのだ」

〔白沢ナベ氏〕

神様は夢の中で、人間の枕元に立って伝える。おつげするは、何というかわからない。マカナク アイェ コロ ピリカ makanak a=ye kor pirka 「なんとはいいいか」

〔白沢ナベ氏〕

おつげするは、カムイ イウエンタラプテ kamuy iwentarapte という。カムイ エウ ウ

エンタラプテ kamuy en=wentarapte は「私に夢みせて」ということ。

〔小田イト氏〕

ア タカレ a=takare という言葉はきいたことない。

〔白沢ナベ氏〕

ヌプリ ケシ ウン プリ ウエン クル nupuri kes un puri wen kur 「山の端にいる神（気の荒いクマ）」がイウエンタラプテ iwentarapte「夢を見せる」話は聞いたことない。この神は人も殺す。これはウエンカムイ wenkamuy「悪い神」だ。ヌプリ コロ カムイ nupuri kor kamuy 「山の神」というのなら言うけど。タカラ takar 「夢」はあまり出ない言葉。ウエンタラプ wentarap は使う言葉。オンネ ウタル onne utar 「年寄り」はタカラ takar は使わなかった。

〔白沢ナベ氏〕

良い夢を見る方法はない。夢は大事なものだけれど。

〔白沢ナベ氏〕

モコロアプカシテ mokor'apkaste 「夢遊病」

モコロコモシ ワ アプカシ mokor komos wa apkas 「半醒半眠であるく」ともいう。

モコロイタクテ mokor'itakte は、良い神様がついている人は、悪いものが近付くと追い払うためにしゃべりだすものだという。そういう人は長生きする。この話は父から聞いた。

〔白沢ナベ氏〕

息について

「息をあらげる」は、ヘーセヘーセ hēsehēse だが、「息せききる」のは、ポロ ヘセ poro hēse という。クシンキ ワ ナーアニ クタストゥイ ku=sinki wa na ani ku=tasutuy 「疲れて危なく息が切れた」、クホユブ ワ アイネ クシンキシキ ワ クタストゥイ ku=hoyupu wa ayne ku=sinkisinki wa ku=rasu-tuy 「走って疲れきって息が切れた」。タス tasu は、「息、呼吸」。

ホユブ エエシンキ、ホユブ アニ エシンキ カシパ ソモ キ ヤ hoyupu e=esinki, hoyupu ani e=sinki kaska somo ki ya? 「走って疲れて、（ここで言い淀んで、言い替えた）走って疲れ切ってないかい」と相手に尋ねる。タンポ オツ タ タストゥイ エトク タ クホユブ ルウェ ネーナ tanpo ot ta tasutuy etok ta ku=hoyupu ruwe ne na 「まだ息切れるのは軽かった」。

〔白沢ナベ氏〕

走って疲れるとシンキ ワ ヘセヘセ sinki wa hesehese 「疲れて喘ぐ」という。

〔小田イト氏〕

話す動作

タアングル taankur は「あんた」ということ。赤ちゃんがぎんぎん泣くときは、イラナクカ iranakka 「うるさい」という。女がしゃべってうるさいとき、イラムシツネレ メノ

コ ウタラ iramsitnere menoko utar 「うるさい、女達」と言える。

〔小田イト氏〕

オポソプ ネプ カ アヌ ハウエ カ イサム ノ メノコ ウタラ ウコイタク ハウエ
アン oposop nep ka a=nu hawe ka isam no menoko utar ukoytak hawe an 「それを通して
何も聞こえないほど女達がおしゃべりをしているな」とも言う。ウコイソイタク ukoysoytak
「おしゃべりする」もパロトゥナシ parotunas 「おしゃべりだ」のうちだろう。

〔白沢ナベ氏〕

食事の礼儀

クマの肉をいただいたら、カムイノミ kamuynomi (お祈り)した酒をいただいたら、エト
アップ カル etuhu kar (鼻の下を人差指で左から右にこする)する。ハープハブ hāphap (両
手を手の平を広げて上下に動かす)ことも、エトアップ カルも私の子供の頃にはもうしなくなっ
ていた。

〔小田イト氏〕

他人の家でご馳走になるときもエトアップ カル する。エトアップ カル は「いただきます」
という意味の仕草で女性のみする。男性は、オンカミ onkami(両手を手の平を上にして広げ
上下に動かす)。

エエトアップ エカル オイラ ナ e=etuhu e=kar oyra na「エトアップ カルするの忘れたよ」
エエトアップカル ヤン e=etuhukar yan (??)といえるかどうかわからない。

〔白沢ナベ氏〕

オハウ ohaw にはチェブ cep(魚)あるいはカム kam(肉)を主体として野菜を加える。
肉と魚と一緒に混ぜることはない。オハウは実(オハウ イペヘ ohaw ipehe あるいはオハ
ウ ヌミヒ ohaw numihi)からなる。汁をオハウ ルリヒ ohaw rurihi という。肉と魚を
一緒に入れたのを見たことがない。

サヨ sayo を飲む(ク ku)とは言えない。サヨ エ sayo e「カユを食べる」という。
オハウ ohaw も飲む(ク ku)とは言わず、食べる(エ e)という(オハウ エ ohaw e)。
サヨ イペヘ sayo ipehe「カユの実」、サヨ ルリヒ sayo rurihi「カユの汁」という。カユ
の実としてはウバユリ(ヤマユリ)団子、豆、麦入れる。トゥレブ サヨ turep sayo、豆サヨ、
麦サヨという。カパト サヨ kapato sayo (コウホネのでんぷんのおかゆ)もある。

トゥレブを湯でもどして団子にする。団子が飽きると削ってサヨに入れる。サヨには魚と肉、
野菜は入れない。

〔白沢ナベ氏〕

オハウを先に食べ、つぎに口直しにサヨ sayo をすする。おにぎりだけを食べることをコ
メ イペ パテク kome ipe patek という。

〔小田イト氏〕

挨拶・礼儀

ハーブ ha:p という言葉は、女の人だけが用いて、男の人は言わない。ハーブ ハブ ha:p hap ということがあるが、これは本当に大事なもので、たとえばクマの肉などをもらった時に言う言葉だ。

男の人と女の人が久しぶりで会うと、男の人から先にオンカミ onkami しながら、エチエランカラブ ナー eci=erankarap na 「久しぶりであったね」という。女の方は、両手の甲を上にして人差指を平行に突き出し擦り合わせるように右手の指を自分の体の方にひいた後、鼻の下をその人差指で左から右に擦るように動かす。その時に、ハーブという。人差指をこするのは、女のオンカミ onkami だ。母親が、カマカにいるいとこエカシ兄貴エカシと会ったときにそうしているのを実際に見た。カマカは、今では近いけれど昔は馬ぐらいしか乗り物もなく、年寄りがそう簡単に行ける距離ではなかったので、なかなか会えなかったものだ。それで、母と会ったときにそういう挨拶をしていた。

久しぶりに会ったのが道路であったなら、被りものをもって、道路のへりに膝をついて座り、男の方からオンカミしながら挨拶し、女はそれに答えて女のオンカミをしてハーブといいながらエトゥフカラ etuhu kar する。母親が見せてくれたから実際に道路のへりで挨拶しているのを見たことがある。

日頃会うような人には、こういう挨拶はしない。「どこへ行くの」と聞かれて、マチヤ オルン クサン シリ ネ ワ maciya orun ku=san sir ne wa. 「街へ降りて行くところです」とか クニーナ クス カルパ シリ ネ ワ ku=nina kusu k=arpa sir ne wa. 「薪をとりに行くところです」と答えるぐらいだ。

〔白沢ナベ氏〕

イランカラブテ irankarapte は、男の人でも女の人でも使う。

〔小田イト氏〕

男の人と男の人が会うときには、互いに手の平を合わせ腕全体を左右に動かしながら擦り合わせた後、両手の平を上にして下腕を上下に動かす。これをウコオンカミ ukoonkami 「互いに拝み合う」という。

イオマンテ iomante やイチャルパ icarpa、カムイノミ kamuynomi の時には、客の男は、主人に対してオンカミして挨拶し、主人もそれに対してオンカミして答える。その時の客の口上は、たとえば、アイタカク アイェ クス イペ クス エク ペ アネ ルウェ ネ a=y=tak [y]ak a=ye kusu ipe kusu ek pe a=ne ruwe ne. 「あなたが私を招くと言いましたので食べにやってきたのですよ」とかアイタカク アイェ クス イク クス エク ペ アネ ルウェ ネ a=y=tak [y]ak a=ye kusu iku kusu ek pe a=ne ruwe ne. 「あなたが私を招くと言いましたので飲みに来たのですよ」とか言ってオンカミする。御主人に挨拶される前に客が挨拶する。そしてイヤイライケレ iyayraykere 「ありがとう」という。アイタカク アイェ ワ クス アエラムリテン エカン ルウェ ネー ナ a=y=tak[y]ak a=ye wa kusu a=eramuriten ma, ek=an ruwe ne na. とか、アイタカク アイェ ワ クス アエラムリテン マ ナニ エ

カン ルウェ ネ a=y=tak [y] ak a=ye wa kusu a=eramuriten ma nani ek=an ruwe ne.
「あなたが私を招くと言われて喜んですぐに来ました」ともいう。「招かれる」を a=y=tak という代わりに、簡単に a=en=tak と言っても構わない。この時の言葉は、ラムリテン ramuriten
「心が和らいでいる=喜んでいる」しているのだから言葉の調子も柔らかく言う。

〔白沢ナベ氏〕

カニ カ ケーラムリテン ワ ケク ルウェ ネ k=ani ka k=e:ramuriten wa k=ek ruwe ne. 「私も喜んで来ていますよ」

〔小田イト氏〕

女と女の場合は、オル セタクコ ウンヌカラアン カ ア エラムシカレ or setakko un =nukar=an ka a=eramusikare「長いこと会わなかったね」と言い、あとに続けて、ネウン ネ コロカ エトーテクノ エアン ナ ルウェ neun ne korka e=totekno e=an na ruwe「元気でいて良かったね」という。その時、両手を握り合って上下に振り、その手を離れた後に手や肩、膝をさすりあうこともある。これをルィルィパ ruyruypa という。

〔白沢ナベ氏〕

6-7. 交易・通婚・戦争

通婚圏

親はこの川筋（千歳川）の人はみんな「糸を引いている」といっていた。長沼から千歳の間は皆血がつながっている。よそから嫁いで来るというのはあまり聞かない。ただ、日高から縁づいて来た人を知っている。

〔小田イト氏〕

よそのコタンでは、昔はシコトウンクル sikotunkur（千歳の人）はいなかったと言っている。それなら私達はどこから来たのか。ウエペケル uepeker（昔話）にもどこから来たかという話は聞かない。私達はアシル シコトウンウタル asir sikotunutar（新千歳人）だ。

〔白沢ナベ氏〕

ウウエペケル uwepeker に良く出て来るウラユシナイ urayusnay（地名）にはトパットウミ topattumi（夜襲）がよくあったようだ。クスルクツ ウン クル kusurkut un kur とクスン ノシキ ウン クル kusun noski un kur という根性悪い（ウエン サムペ コル wen sampe kor）人々が、あまり根性悪くないクスル エムコ ウン クル kusur emko un kur を強く誘ってウラユシナイにトパットウミに来たそうだ。千歳ではトパットウミ topattumiがあったという話はあまり聞かない。ただし、有珠、虻田の方から来た者らに襲われたことがあるそうだ。

????（要調査）父の話ではストウクンネヒ sutukunnehi というところがあって、それはトパットウミをしにきた人たち（トパットウミ クス アリキブ topattumi kusu arki p）とスツ sutu（棍棒）で戦争したからついた名前だそうだ。

〔白沢ナベ氏〕

私の家の近くにアチュウウシ aciw'usi というところがある。義経が魚を突いたところだ。

〔小田イト氏〕

イシカルウングル iskar un kur の話はポイヤウンペ poyyaunpe の話の中でいっぱい聞いている。ポイヤウンペのおばさんがイシカルウングルの奥さんになって行き来があった。

〔白沢ナベ氏〕

ポイヤウンペが山に行って大きなクマを殺して皮をはいでいるところにポン イシカルウングル pon iskar un kur が来て、「おまえ、どこのもんで取りに来た」というので喧嘩が始まったという話もある。

〔白沢ナベ氏〕

モシリパウングル mosirpa un kur がポイヤウンペの住んでいるところにトパットウミに来たという話がある。

〔白沢ナベ氏〕

私の父は日高、鷓川、厚真、白老の人たちとは言葉が同じだが、モシリ エトコ mosir etoko の人ら（十勝 [トカプチ tokapci] の人たち）の言葉は全然わからないと言っていた（トカプチ ウン クル フナク ワ アリキ ウタン ネ、ネ ヒンネ エアルキンネ イタク ハ ウェ アエラムペウテク tokapci un kur hunak wa arki utan ne,ne hinne earkinne itak hawe a=erampewtek）。十勝は一番のモシリ エトコ mosir etok（地の果て）だ。（白沢ナベ氏は十勝を釧路よりさらに遠いところと認識している）。子供のとき十勝の女が家に泊まったことがある（トカプチ ウン マツ レアンチカル ワ トウラノ レウシ tokapci un mat reancikar wa turano rewsu）。その人は「とよーくて、とよーくて、こはーい、こはーい」と言った「遠くて、こわい（疲れた）」という言葉だ。

〔白沢ナベ氏〕

厚真から千歳に来ていた女が厚真に帰るとき、夜、二つの大きな星（クマの目）が女を追ってきた。キツネとフクロウが道の両わきから「早く逃げろ」とせがした。女は靴もはかずに雪の中、川の中をはしったので、凍傷になり（ウエチ ueci）、足の指がなくなった。クマはあずまの勇士たちに殺され、腐って倒れている木の神に捧げられた。

（人を襲うようなクマは送らずに腐れた倒れ木の神に捧げるという。クマの頭は腐った木の株に載せる。〔白沢ナベ氏〕）（11-1-4 参照）

〔白沢ナベ氏〕